

21世紀の病気の原因は化学物質とヘルペスウイルスと言いつけてきました。たまたま薬の間屋に勤めている私の患者さんが、患者に渡しているヘルペスについてのパンフレットを参考になるかもしれないという訳で、下のようなタイトルで書かれた小冊子をくれました。渡す時に彼は付け加えました。「先生とは考え方が異なっていますが、読んでおいてください。」と。そこで、東京女子大の皮膚科教授でいらっしゃる川島眞先生が書かれた小冊子の違いを明らかにしたいと思ったので、この私のコラムでその違いを指摘し、私の論理を展開しておくと同時に必要なコメントも非常に詳しく分かりやすくしておきました。どちらが正しいかは皆さんが判断してください。真実はただ一つですが、あなた方は判断する力はないかもしれませんが、私が治してあげた患者さんは、私が正しいということを認めてくれると思います。

口唇ヘルペス（単純ヘルペス）はこんな病気です

川島先生は口唇ヘルペスについてしか書かれていませんが、私はヘルペスについては、私のコラムでヘルペスが引き起こす病気の全てについて詳しく書いていますから、そこを読んで比べてみてください。

監修 東京女子医科大学 皮膚科教授 川島 眞

1. こうしん口唇ヘルペスってどんな病気？

くちびるやその周りにピリピリ、チクチクするような違和感やかゆみが生じた後、軽い痛みを伴う水ぶくれができる病気です。（ピリピリやチクチクするような違和感は、唇の下に広がっている痛みを感じる末梢神経の神経線維にいるヘルペスウイルスを免疫がやっつけているからです。具体的にはNK細胞やヘルペスウイルスを認識できるキラーT細胞が、神経線維にいるヘルペスウイルスを殺そうとする時に傷がつき、神経線維が傷ついたのを痛みとして感じるのです。

痒みが出るのは、どんな炎症でも、起こる時には様々な炎症細胞がヒスタミンを出して、このヒスタミンが神経のH1レセプターにつくと、痒みを感じられるのです。

水ぶくれができるのは、粘膜にいるヘルペスが侵入した粘膜細胞が、NK細胞やキラーT細胞にヘルペスウイルスもろとも粘膜細胞も自殺させる時に、細胞同士を結びつける接着装置に傷害が生じ、粘膜を作り上げている細胞の一つである有棘細胞が融解し、炎症のために血管からもれ出た水分の中に含まれた粘膜から遊離した数多くの有棘細胞の集まりが水分と一緒にあって作ったのが水ぶくれなのです。このような水ぶくれは、粘膜のみならず、ヘルペスがいる皮膚にも同じように見られます。）疲れた時や発熱時など免疫が低下している時に症状が出ます。（この説明は全く間違っています。正しくは「免疫が症状している時にこのような症状が出る」と書くべきです。症状は常に免疫と敵との戦いで初めて生ずるものであり、口唇ヘルペスの場合は、まさにヘルペスが敵であります。免疫が下がっている時には症状が出るのではなくて、免疫が下がっている時にはヘルペスウイルスが増え続けているだけであり、症状は全く出ないのです。東京女子大のお偉い先生がこんな単純なミスをされていることに気づいておられないのが残念です。しかも疲れた時は免疫が下がり、発熱時は免疫が上がっているにもかかわらず、まるで反対の免疫の働きを一緒くたにしておられるのはなぜでしょ

うか？と川島先生に聞きたいぐらいです。) 症状の出る頻度は数年に1回という方から1年に数回出るという方までさまざまです。初めて症状が出る時には、水ぶくれが沢山できることがあります。再発の場合には水ぶくれは少なくなり、症状が出る範囲も狭くなります。(皮膚の上皮細胞の構造と粘膜の上皮細胞の構造の違いについて、少しコメントしておきましょう。皮膚は体の外部の全面を覆っています。皮膚の総面積は大人で約6.7㎡あります。ところが外部と接触しているのは皮膚だけではなくて、外から見える部分は見て分かるように唇は粘膜でできています。ところが外から見えない外部と接触している粘膜があります。外から見えない内臓で管になっている臓器である消化器・呼吸器・泌尿器・生殖器などは、管の内側の面を粘膜が覆っています。皮膚と違って、臓器や部位によって違った粘膜上皮から成り立っています。

ご存知のように皮膚の上皮細胞は4層から成り立っている部分と5層から成り立っている部分の2種類しかありません。皮膚の上皮細胞の4層を下から言いますと、まず皮膚の上皮細胞の幹細胞ある基底細胞、その上が有棘細胞、顆粒細胞、角質細胞になります。5層あるところは掌と足の裏の皮膚だけです。下から、基底細胞、有棘細胞、顆粒細胞までは同じであります。次に淡明細胞が加わります。最後が角質細胞になります。

ところが粘膜は皮膚の細胞と違って明確な層に分けられていません。というよりも粘膜上皮についてはあまり研究されていないのです。というのは、同じ臓器の粘膜も先程述べたように部位によって非常に変化が多いので、単純に粘膜の上皮細胞をだいたい6種類に分けています。重層扁平上皮、多列腺毛上皮、移行上皮、単層円柱上皮、単層立方上皮、単層扁平上皮があります。単純ヘルペスは人体に最初に感染するのは、接触感染や飛沫感染によってであります。この2つ退感染様式によって、上記の皮膚の上皮細胞や粘膜の上皮細胞にまず入り込み、次にその近くの運動神経や感覚神経や自律神経などの末端の神経に入り込んで、体中のいたるところの神経に感染し、免疫が落ちるたびに増殖し、免疫に見つけられた時には様々な神経炎が生じ、患者を悩ませるのです。負けそうになると神経節に隠れて、再び免疫が弱まった時に神経節から抜け出し、神経線維に乗って増殖していくというたちごっこを人間が死ぬまでやり続けざるをえないようにさせるのです。しかしながらヘルペスと免疫の戦いは神経細胞ですから、息ができなくなって死ぬことは絶対にはないのです。

この世には神経に関わる病気はゴマンとあります。というよりも、神経○○病という名称の病名が無数にあると言うべきです。そのような無数の病名をつけられて悩み続けている患者の病気の原因はほとんどが分からないとされています。実はその病気の原因はほとんど全てがヘルペスと免疫が様々な神経で戦う時に炎症が起こり、その神経の機能が正しく発揮されない時に出てくるものです。神経は全身の隅々まで張り巡らされていますから、ヘルペスとその様々な部位の神経に潜んでいるヘルペスと免疫の戦いによって生じる神経炎によって病名がつけられているに過ぎないのです。私のこのコラムのヘルペスの項を読んでおられる方は既にご存知のように、メニエール病も、耳鳴りも、難聴も、目眩も、吐き気も、頭痛も、片頭痛も、肩こりも、痺れも、筋痛症も、皮膚筋炎も、慢性疲労症候群も、目の充血も、目の奥の痛みも、座骨神経痛も、肋間神経通も、全てそれぞれの症状を起こす神経でヘルペスと免疫が戦っているために生じているのです。

よく見られる神経疾患であるのですが、遺伝子病ではなく、かつ原因が不明と

いう病気でヘルペスが関わっている病名をさらにいくつか思うままに簡単な説明もつけて掲げておきましょう。

①多発性硬化症②ギランバレー症候群（急性炎症性脱髄性多発神経根炎）。多発性硬化症とギランバレー症候群の違いはどこにあるのでしょうか？多発性硬化症は中枢神経の神経繊維を覆っているミエリン鞘という髄鞘がなくなることであり、一方ギランバレー症候群は末梢神経の神経線維の髄鞘がなくなることです。ギランバレー症候群を急性炎症性脱髄性多発神経根炎というのは、この病気の大半は急性上気道炎や急性胃腸炎などの先行感染が起こった後に、急に神経根という細胞体に近い部分の神経線維の髄鞘がはがれてしまうからです。

③重症筋無力症。この病気はまぶたが知らぬ間に下がってしまい、まぶたの筋肉に力が入らなくなり、うえに上がらなくなる症状です。重症の“重”はまぶたが重くなるという意味で、病気が重症である訳ではないのです。④ジスキネジア（ジスキネジー）。ジスキネジアというのは、筋肉を動かす意思がないのに、突然に異常な筋肉の動きが生じてしまう病気です。例えばチックとって、顔や首や肩などの筋肉が動かすつもりがないのに収縮を繰り返す症状です。さらに頻回にリズムカルなまばたきをしたり、舌鼓を打ったり、拍手などを繰り返すのもチック症状です。また書痙とって字を書こうとする時に指のけいれんが起り、書くことが困難となる状態もジスキネジアの例です。

⑤顔面神経麻痺。これは一番よく見られるのは左右の口角が水平にならずに歪むことです。⑥熱性痙攣⑦てんかんの一部⑧多発性筋炎⑨筋萎縮性側索硬化症の一部⑩脊椎管狭窄症⑪脳脊髄液減少症⑫ベーチェット病の一部⑬フォークト-小柳-原田病の一部。この病気については**ブドウ膜炎のコーナー**を読んでください。⑭外眼筋炎⑮痙性斜頸⑯メージュ症候群。ブリューゲル症候群とも呼ばれます。まぶたが痙攣し、同時に口の周辺のジスキネジアが合併することが多い症状です。⑰ホルネル症候群。瞳が小さくなる、まぶたが下がる、眼球がくぼむ、の3つが主要症状であります。さらに顔面に汗が出なくなります。このホルネル病は重症筋無力症に他の症状が加わっただけです。瞳孔が縮小するのは交感神経にヘルペスウイルスが感染し、瞳孔を広げる散大筋が麻痺してしまうからです。⑱ミオトニア（筋緊張症）などなどあります。ミオトニアは強く収縮して緊張した筋肉がなかなかすぐに弛緩しない症状であります。とどのつまりは肩こりや首こりは一種のミオトニアなのです。肩こりの人が抗ヘルペス剤を飲めば極めて簡単によくなります。つまりミオトニアと呼ばれる筋緊張症はヘルペスによるものなのです。本当は以上の病気の内容をもっと具体的に説明し、どのようにこれらの病気がヘルペスと関係があるかを書きたいのでありますが、またの機会にしましょう。

皆さん、私がなぜここまでヘルペスにこだわるかご存知ですか？このような病気に対して日本中の医学書はもとより、世界中の医学書を紐解いても、ヘルペスが原因であるという文章が一行もないからです。なぜこれほど自信を持って今説明している病気がヘルペスによるものだと言い切れると思いますか？それは30年間にわたる開業生活の中で、あらゆる病気の原因を追及し、患者の免疫を漢方で上げることによって以上に挙げた様々な病気を治してきたからです。今説明しているこれらの病気の原因は単純ヘルペスや帯状疱疹ヘルペスによるものだから、抗ヘルペス剤を投与することによって、ギランバレー症候群も重症筋無力症もホルネル症候群も何人か治した経験があります。昔は手記を書いてもらうこ

とをしていませんでした。今思うと残念なことです。これからは無理にでも書いてもらおうつもりです。いくら頼んでも書いてくれない患者さんが多いことは残念ですが。

ミオトニアである肩こりなどは抗ヘルペス剤を服用すれば確実によくなるのです。昔から肩こりで悩んだ人たちの原因がヘルペスと肩や首の神経を支配している脊髄神経に入ったヘルペスと免疫との戦いで生じているということを知ってびっくりしましたか？これだけ明々白々な真実もどんな医学書にも書かれていないのです。おかしいと思いませんか？

ところが近頃、なぜだかは分かりませんが、このようなヘルペスによる病気に対して保険治療ができなくなってしまったのです。保険審査会に異議を申し立てたのですが、認めてもらえることができなくなったことが極めて残念です。大病院では原因の分からない神経に関わる病気に対して、いくらでも治験として大量の抗ヘルペス剤を投与できるにもかかわらず、世界中の医学者は誰もしないのです。やはり医薬業界が生き残るためには病気を作らなければならないからです。口先では国民の健康のために献身すると言いながら、私でも知っている簡単な真実、つまり現代の病気の原因は化学物質とヘルペスウイルスだけであるということに絶対に認めようとしません。従って、この2つを認めない限り、現在難病といわれている病気の原因のほとんどが不明となるのです。それどころか絶対にありえない自己免疫疾患という新しい病気が生まれてしまうのです。しかもアレルギーといわゆる自己免疫疾患とされている膠原病は同じ病気であるにもかかわらず、世界中の医学書には一行も出てこないのです。自己免疫疾患などが存在し得ないのは免疫学を真剣にちょっと勉強すればすぐに分かることであるのに、拝金主義の医学者たちはいつまでもいつまでも念仏のごとく「自己免疫疾患は原因不明の難病であり、治らない、治らない」と言い続けています。残念ですね。残念ですね。

ここで皆さん、病気とは何だと思えますか？自覚症状的に自分の体に異常が起こったという場合に病気だと思うでしょう。病気と自覚する症状の中で一番多い症状は何でしょうか？つまり自分が病気だと思って病院に行かざるをえなくなる最も多い症状は何でしょうか？痛みでしょう。これが90%以上を占めるでしょう。次に何でしょうか？次は熱やだるさや痒みでしょう。それ以外には何があるでしょう？五感の異常でしょう。見えない、聞けない、味わえない、においが嗅げない、触っても感じない、しゃべれない、動けない、食欲がない。これらの症状は全て神経で自覚されるものです。

ここでおまけに非常に面白いお話をしておきましょう。シャイドレーガー症候群という病気があります。この病気はアメリカのシャイ博士とドレーガー博士によって報告されました。この病気の症状は自律神経の傷害を中心とし、さらにパーキンソンニズムの症状と小脳性運動失調の症状の3つが加わった病気です。私は今までヘルペスとの戦いは、免疫がヘルペスを見つけ出す神経繊維において戦われるために神経線維の炎症が起こり、電気信号が正常に伝わらないために、様々な神経症上があると主張してきました。ところがシャイドレーガー症候群の研究では、脊髄や延髄の神経節の細胞が消えてなくなっていることが分かりました。さらに大脳基底核や小脳の神経核や橋にある多くの神経核にいる神経細胞体が消えてしまっていることが分かりました。このためにパーキンソンや小脳の傷害による症状が引き起こされるのです。これは何を意味するのでしょうか？いつも言っているように、ヘルペスはひとたび神経節(神経核)に隠れてしまうと、

免疫が手を出せなくなると言い続けてきました。ところがもし神経核に潜んでいるヘルペスウイルスのいずれかが、神経細胞体がたくさん集まっている神経核で大量に増殖してしまい、神経細胞体が生き続けることができなくて、どんどん数が減ってしまえばどうなるのでしょうか？例えばパーキンソンというのは黒質にある神経細胞がヘルペスウイルスが増え続けたために、神経核がヘルペスウイルスに乗っ取られてしまったらどうなるのでしょうか？

そもそもウイルスというのは自分自身は遺伝子を持っているだけで、その遺伝子を発現して必要なタンパク質を作る材料のみならず、エネルギーさえ持ち合わせていないのです。そのために黒質の神経細胞隊に入ったウイルスは、その神経細胞体にある素材やエネルギーを盗み取って利用し、自分だけが増殖するのです。すると黒質の神経細胞は増殖することができなくなるどころか死んでしまうのです。これが黒質の神経細胞が死んでしまって、カテコラミンのひとつであるドーパミンを作れなくなってしまうのではないかと10年以上前から考えていました。パーキンソン病に見られる特徴的な神経細胞や神経突起の中に見られるレヴィ小体はヘルペスが増え続けたために萎縮変性した神経細胞体の残骸と、ウイルスの粒子ではないかと考えています。現在レヴィ小体はドーパミンの変性物と考えられている神経細胞内封入体といわれます。

封入体というのは、元来、ウイルス感染細胞などの中に見いだされる顆粒状の構造体であります。従ってこのレヴィ小体は神経細胞に感染したヘルペスウイルスに対する戦いの結果生まれたものではないかと私は考えているのです。すると黒質の神経細胞で作られるドーパミンという非常に大切な神経伝達物質が作られなくなります。このカテコラミンのひとつであるドーパミンが作られなくなると、パーキンソンやシャイードレーガー症候群のような病気を引き起こしてしまうのです。

残念なことに現在使われている抗ヘルペス剤は、アシクロビルだけあります。このアシクロビルのヘルペスを増やさせない力はそれほど強くないのです。35年前にアシクロビルよりも2000倍もの強さをもつソリブジンという抗ヘルペス剤が開発されたのですが、あまりにもよく効くのでこの世から抹殺されてしまいました。（ソリブジン薬害事件についてはコラムを読んでください。）当時の東京慈恵医大の教授であった新村真人教授の指導の元にヤマサ醤油が開発したのがソリブジンでありました。ひょっとすれば新村先生はソリブジンがパーキンソンの患者にも効いたということを知っておられたかもしれません。現代の原因不明の病気の原因はヘルペスと化学物質だけですから、パーキンソンにもソリブジンが効いてしまうと、ほとんど全ての病気がなくなり、医薬業界は壊滅してしまう恐れがあったので、この世から抹殺された理由の一つだったかもしれません。このソリブジンが今使えるものだったら、それこそ日本の42兆円の医療費は1兆円で終わってしまっていることでしょう。残念です。

いずれにしろ、熱がなく、ときには微熱が見られ、ステロイドで症状が消え去るものは、膠原病でない限りはヘルペスによる病気だと考えてよいのです。実は悪性リンパ腫という血液の癌も、ヘルペスであると考えていますが、これについては後で詳しく書く予定です。乞うご期待。）

2. どうして口唇ヘルペスになるの？

口唇ヘルペスは、"単純ヘルペスウイルス"というウイルスに感染することで起こ

る病気です。症状が出ている人の水ぶくれ、唾液、^{ろいゑき}涙液などに接触することで感染します。特に、水ぶくれの中にはウイルスが沢山存在するため注意が必要です。また、ウイルスが付着したタオルやコップなどの物を介して感染することもあります。症状が出ていなくても、唾液などにウイルスが含まれていることがあります。この時にキスやおぼずりをすると、うつる可能性があります。

(水ぶくれができるのは、粘膜にいるヘルペスが侵入した粘膜細胞が、NK細胞やキラーT細胞にヘルペスウイルスもろとも粘膜細胞をも自殺させる時に、細胞同士を結びつける接着装置に傷害が生じ、粘膜や皮膚を作り上げている細胞の一つである有棘細胞が融解します。さらに炎症のために血管からもれ出た水分に、この融解した有棘細胞の集まりが水分と共に、ヘルペスウイルスの死骸や生き残ったヘルペスウイルスが集まったものが水ぶくれなのです。このような水ぶくれは、粘膜のみならず、ヘルペスが皮膚にも同じように見られます。

水ぶくれを英語でbleb(ブレップ)といいます。ブレップという言葉は、元来、肺に見られる「気腫性嚢胞」という意味で使われました。水ぶくれの意味で使われるブレップというのは、さしずめ「水腫性嚢胞」と呼んでもいいでしょう。気腫性嚢胞のブレップは酸素と二酸化炭素を入れ替える肺胞の壁が破壊され、融合され、拡張により生じた空気の詰まった空間が胸膜の2層の弾力板の一部を破壊して、胸膜の間に入り込んだ胸膜内の気体のふくらみや、肺実質である肺胞にできた空気でふくらんだ異常な袋であります。この肺胞が潰れてしまうと、このブレップがたくさん作られ肺気腫という病気になることもあるのです。

この肺気腫の一番大きな原因は、持続する喫煙によってタバコに含まれる様々な化学物質が呼吸細気管支に蓄積され続け、これを異物と認識した好中球が処理するために集まり、異物であるタバコの化学物質を食べた後、好中球から放出されるエラスターゼという酵素によって肺胞の破壊が起こるのです。これはちょうどヘルペスウイルスが皮膚や粘膜の上皮細胞に入り込んで、それを殺すためにナチュラルキラー細胞やキラーT細胞からパーフォリンやグランザイムBを出して細胞を破壊し、その結果皮膚や粘膜に水ぶくれができることと似ています。つまり肺のブレップの原因は、異物であるタバコに含まれる化学物質であり、皮膚の水ぶくれの原因は、ヘルペスウイルスであります。

ちなみにお灸をやった後に水ぶくれができることがあります。なぜでしょうか？お灸の原理はお灸を据えた皮膚の局所の免疫を上げるためです。局所に高熱を与えると、血管が一挙に開いて様々な免疫細胞やサイトカインが血管内から皮膚の組織に出て行きます。当然、ヘルペスが潜んでいる皮膚の上皮細胞の周辺にも、これらの免疫成分がたくさん集まってきます。ヘルペスが感染している細胞が多ければ多いほど、NK細胞やキラーT細胞で殺される細胞が多くなり、その結果、水ぶくれが生じることがあるのです。

膠原病の人にお灸をしてもらうのはなぜだかご存知ですか？やはり免疫を上げるためです。膠原病の人は、抗体のクラススイッチ、つまりIgGからIgEに抗体を変える必要があります。膠原病を起こすTh1細胞から、アレルギーを起こすTh2細胞を、お灸をやっている近くの所属リンパ節から集めることができるからです。膠原病の人に必ずお灸をやってもらうのは、お金をかけずに免疫を高めることができるからです。もちろん、熱いのは我慢してもらう必要がありますが。)

3. どうして再発するの？

単純ヘルペスウイルスは一度感染すると、生涯にわたって神経に潜伏します。

（「神経に潜伏する」という言い方は不正確です。神経は3つの部分から成り立っています。神経細胞体と、神経軸索（神経線維）と、神経突起の3つであります。ヘルペスが隠れることができる場所は、数多くの神経細胞体が集まっている神経節だけあります。神経節は外套細胞で何重にも巻かれて保護されているので、免疫は神経細胞体にいるヘルペスウイルスを見つけることができないので、ヘルペスウイルスにとっては最高の隠れ場となるのです。

ヘルペスウイルスが天才のウイルスであるのはなぜだかご存知ですか？人体に入った異物が免疫に認識されることがない場所はどこだと思いますか？骨で囲まれた中枢神経である脳と脊髄がまず考えられます。他にないでしょうか？あるのです。末梢神経の神経節であります。末梢神経は骨には囲まれていないのですが、末梢神経で一番大切な神経細胞を守るために神経節は何重にも外套細胞に囲まれているのです。ちなみに神経節というのは、下等動物では中枢神経の役割をしていたのです。

いずれにしろ、これらの神経は動物の生命活動には最も大切な部位ですから、異物が入らないようにすることが一番大事です。異物が入らない限りは免疫の働きは必要ないからです。免疫に見つかれば炎症が起きるので、神経は大きな損傷を被ってしまいます。ところがあらゆる病原体の中で、ヘルペスウイルスだけが神経に住み込むことができるのです。このヘルペスウイルスだけが中枢神経も末梢神経のいずれにも入り込むことができるのです。なぜでしょうか？ところが末梢神経は最終的には必ず中枢神経と繋がりががありますから、ひとたび末梢神経に入り込んだヘルペスウイルスは、神経に沿って末梢神経の神経節はもちろんのこと、さらに中枢神経の神経核にまでゆっくりゆっくりと時間をかけて忍び込んでいくのです。なぜならば神経は全て繋がっているからです。そのときには免疫は手も足も出なくなってしまうのです。もちろん中枢神経にもグリア細胞という免疫の働きを持っている細胞もいることはいるのですが、免疫の働きは弱いのです。だからこそ始めに書いたように、このようにして長い時間をかけて中枢神経に入り込んで、老年期に達して徐々に徐々に免疫に見つかり、脳や脊髄などで炎症を起こし、パーキンソン病やシャイ-ドレーガー症候群を引き起こすと考えられるのです。このように考えていくと、アルツハイマー病もヘルペスが原因ではないかという考えに至るのです。従って今日はアルツハイマーについて真剣に考えてみたいと思います。

私のコラムで常々書いていますように、原因のない病気はこの世に何もないのです。あらゆる感染症が人類を悩ませてきたのですが、ワクチンと抗生物質で病原体が引き起こす感染症で亡くなる人が文明社会では消えてなくなったこともしばしば書きました。だからこそ文明国においては病気で死ぬ人がなくなり、長寿社会が実現したのです。最後は老衰か癌か自分で作った成人病で死んでいくだけになりました。しかしながら、若くても老いても死ぬことはない病気の原因は2つしかないと言ってきました。それは化学物質とヘルペスウイルスだけあります。化学物質が引き起こす病気がアレルギーと膠原病であることは、皆さんご存知でしょう。

それではヘルペスはどんな病気を起こすのでしょうか？神経に関わる全ての病気なのです。先ほど述べたように、末梢神経に入り込んだヘルペスウイルスは、中枢神経奥深くにまで長い時間をかけて侵入していきます。とりわけストレスが強く、そのストレスに耐えるためにステロイドホルモンを出しすぎた人や、大量にステロイドを医者から投与し続けられた人たちは、免疫が高度に低下し、そ

の間に中枢神経奥深くに増え続けた結果、ヘルペスウイルスが原因となるパーキンソンやアルツハイマーを引き起こすのではないかと考えざるをえないのです。そこでアルツハイマーとヘルペスウイルスとの関連を調べだすと、やはり下のような新聞記事が出てきました。

2013年11月に、疲れると現れる「口唇ヘルペス」の原因である単純ヘルペスウイルスが、アルツハイマー病発症に関わっていることが慈恵医大の研究で分かった。症状が出る前に診断できる検査法開発につながる可能性がある。10日から神戸市で始まる日本ウイルス学会で発表する。

単純ヘルペスウイルスは、感染すると脳から顔面につながる三叉（さんさ）神経にすみつく。50歳以上では感染率が7割を超す。普段はおとなしいが、過労や過度なストレスで再活性化し、口の周りに水ぶくれをつくる。アルツハイマー病との関係が疑われていたが、はっきりしていなかった。

さらに別の記事を発見しました。

2008年12月に、マンチェスター大学の研究チームは、アルツハイマー型認知症で死亡した患者の脳のアミロイド班（老人班）にHSV-1が存在することを突き止め、HSV-1が脳への損傷を引き起こしている可能性を示した。マウスを使った実験では、単純ヘルペスウイルスに感染した場合アミロイド班の主要素であるβアミロイドの脳への蓄積がみられた。またアルツハイマー型認知症で死亡した患者の脳を調べたところ、アミロイド班の90%でHSV-1が見つかった。HSV-1がアルツハイマー型認知症を引き起こすと断定するには早すぎるが、研究チームは抗ウイルス剤をアルツハイマー型認知症の治療や予防に役立てられる可能性があるかと期待している。ちなみに、HSV-1に感染するとウイルスは脊髄神経節や三叉神経節などの神経系に潜伏し、実際に口唇ヘルペスを発症する人は感染者の2-4割であるとのこと。

前回はパーキンソン病の黒質の神経細胞にレヴィ小体があるので、これはウイルスに感染した神経細胞がウイルスとの戦いの結果、ヘルペスウイルスの残骸を閉じ込めるために作った細胞封入体であると推論したように、まさにアルツハイマー病において特徴的な老人班であるアミロイド班にHSV-1（単純ヘルペス1型）が存在していることが2008年にマンチェスター大学の研究チームが明らかにしていたのです。このアミロイド班はβアミロイドタンパクであり、これも脳神経細胞に入り込んだHSV-1（単純ヘルペス1型）を脳神経細胞が排除する戦いにおいて作られたタンパクではないかと考えられるのです。しかもアルツハイマー病が進行すると、パーキンソン病に見られる小刻み歩行や、緩慢な歩行、パーキンソン病の無動症状も出現することが分かっています。ただパーキンソン病は、脳の黒質において作られる神経伝達物質であるドーパミンが減るために、黒質から線条体という神経核に情報が送れないために生ずるのです。従ってパーキンソン病の治療はドーパミンを増やす薬です。ちなみにドーパミンを作る神経細胞を持っている黒質をドーパミン作動性神経とか神経線維とか神経軸索といいます。

一方、アルツハイマー病は、脳のマイネルト基底核というところで作られるアセチルコリンという神経伝達物質が脳皮質に伝えられないために生じると考えられています。従ってアルツハイマー病の治療はアセチルコリンを減らさない薬を用いるのであります。世界中で使われているのは、日本の製薬会社が作ったアリセプトという薬です。ちなみに、アセチルコリンを作る神経細胞を持っているマイネルト基底核をコリン作動性神経とか神経線維とか神経軸索というのはドーパミンの場合と同じことです。

皆さん、勉強すればするほど、始めは何の関わりもないと思っていた事象が、

実は全て関わりがあるということが分かるでしょう。以前から、原因のない病気は何もないと言っているように、原因不明といわれている病気の代表であるパーキンソン病やアルツハイマー病が、やはりヘルペスの可能性があるということが分かりだしたでしょう。まるで迷宮入りのミステリーを解明していくワクワクさを一緒に感じてもらうことができるでしょう。学問というのは常に論理的であるのです。病気を治すのは、38億年も生命を生かし続けてくれた100%論理的である免疫の遺伝子であるということを知れば、免疫の遺伝子以外に何もないということがすぐ分かるのに、世界中の医学者はこの真実を誰も口にしないのです。日夜免疫の遺伝子をいじめる薬の製造に邁進し、治らない病気は何一つないにも関わらず、このような免疫を抑える薬を使って逆に新しい病気を作り続けているのです。恐ろしい世の中だと思いませんか？残念ですね。次回もどんな新しい発見が見つかるか楽しみにしてください。)

今日はここまでです。2014/07/31

健康な時は、潜伏しているウイルスは免疫によって抑えられていて活動できないため症状は出ません。(皆さん、健康の意味はご存知ですか？言葉は実態が理解されずにイメージだけで使われることがしばしばあります。いや、言葉とは嘘をつくためにあるのではないかと思うぐらいですね、ワッハッハ！この嘘を真実に思わせる言葉を金の種にしているのが宣伝というものです、ワッハッハ！全ての人が言葉を正確に使うように教育を受ければ良いのですが、私のように真実を語りすぎると世の中がもたないようですね。ワッハッハ！それぞれの人間が持っているエゴの欲望を満たすためには金が必要ですから、お金を儲けるためには嘘をつくのが一番簡単な方法ですからね。例えば健康食品とは何でしょうか？全くこの世に不健康食品などあるのでしょうか？にもかかわらず、なぜわざわざ健康食品という名のついたものが売れるのでしょうか？全く理解できません。

さて、本論に戻りましょう。川島先生が言われる「健康な時」というのは、一体どういう時なのでしょう？彼が言いたいのは、「免疫が抑えられな時」であります。免疫が抑えられないで、つまり副腎皮質ホルモンを大量に出していないときや医者から免疫を抑える薬を投与されていない時という意味なのです。ヘルペスは神経節に隠れていますが、人間の免疫は絶対負けることがない敵ですから、平常時は神経節に封じ込めることができるのです。封じ込めている間は、免疫はヘルペスと戦うことができないので症状が出ないのです。しかしながら、いかに免疫の強い人でもヘルペスは絶対に殺しきれない敵なのです。)しかし、発熱、疲労、ストレス、強い紫外線、外傷などの刺激により免疫が低下して、ウイルスが活動し始めると症状が出てきます。(この文章はまるっきり嘘八百の文章です。医学という学問の世界は真実だけで覆われるべきであるのに、皮肉なことに一番嘘が多い世界です。症状が出るのは、免疫がウイルスと戦うときに初めて出るのは、ウイルスが体内にいても免疫が見つけれない時と、免疫が弱い時には、絶対に症状は出ないのです。皆さん分かりますか？まさにこの文章は、黒を白と言いくるめることと同じです。

近頃のトピカルな嘘についてコメントしましょうか。残念なことに、絶対にありえないSTAP細胞を作ったと主張している、理研の小保方嬢は、疑いをかけられた時の弁明で、極めて短期間に200回もSTAP細胞を作ったと言いました。200回ですよ。そんなに簡単にできるのであれば、正しい写真と論文を提出すればよいのに、なぜ英国のネイチャーからコピーだらけの写真と価値のない論文である

と断定されて、掲載されたSTAP細胞の論文をネイチャーから撤回せざるをえなかったのでしょうか？彼女は同じ記者会見でもう一人STAP細胞を作った人がいると明言しました。それこそその本人を記者会見に呼んで証言してもらえば良かったのではないのでしょうか？それが自殺した笹井芳樹先生だったのです。にもかかわらず、なぜ笹井先生はSTAP細胞があるということを証明すれば何も自殺する必要がなかったのに、自殺したのでしょうか？全て嘘であるからです。

皆さん、韓国で一大スキャンダルがあったことを覚えていますか？韓国で初めてノーベル賞を受賞できるといわれたソウル大学の黄禹錫博士が発表したヒトクローン胚性幹細胞が捏造であったというあの衝撃的なニュースを覚えていますか？ヒトクローン胚性幹細胞（ヒトクローンES細胞）とは何でしょうか？これを完全に説明して皆さんに理解させることは極めて難しいので、大筋だけを簡単に書きます。まず女性の卵子を使ってヒトクローン胚を作成します。そのヒトクローン胚から細胞を取って培養し、ヒトクローン胚性幹細胞を作ったと黄教授は発表したのです。これが真っ赤な嘘だったのです。このヒトクローンES細胞が成功していれば、一度失ってしまった組織や臓器を再生することが可能となるのです。彼の論文は米国のサイエンスに掲載されたのですが、捏造であることがバレて、その論文を取り消す処分を受けました。そして彼はソウル大学を追われてしまいました。皆さん、STAP細胞も全く同じストーリーになったにもかかわらず、STAP細胞の中心人物であった笹井先生と小保方嬢は、なぜ理研から放逐されなかったのでしょうか？理研は2人に責任を負わせるべきだったのに、ありもしないSTAP細胞をもう一度作らせようとするアホなことをやらせだしたのです。STAP細胞が存在すると嘘を言い続けているのは、小保方嬢一人だけであるにもかかわらずです。悲しいことです。

ついでに付け加えておきますと、ソウル大学を追われた黄教授は自殺したと思えますか？実は違うのです。彼は辞めた後、他の小さな名もない研究所でクローン胚性幹細胞を何とかして作ろうと研究を続けているのです。笹井先生は黄教授と同じように研究を続けてSTAP細胞を探し求めれば良いのに、なぜ自殺してしまったのでしょうか？彼は、STAP細胞はいくら努力しても作れないということを知っていたから自殺したのでしょうか？悲しいことです。ちなみに英国のネイチャーと、米国のサイエンスという科学雑誌は、世界最高峰の2大雑誌で、ここに論文が掲載されるということは、世界一流の科学者であることを証明されることと同じなのです。逆に掲載した論文を取り消されることは、学者にとっては最大の恥なのです。

さて本論に戻りましょう。「発熱、疲労、ストレス、強い紫外線、外傷などの刺激により免疫が低下して、ウイルスが活動し始めると症状が出てきます。」と川島先生は書いていますが、こんな文章も大学の先生が書くべき文章ではありません。それでは私が正しく書き直しましょう。書き直す文章は、病気というのはどのように起こるかについての原理原則を示すものですから、よく理解してもらいたいのです。まず病気が起こるには異物が体内に入る必要があります。次にこの異物を免疫が認識する必要があります。異物が少なければ認識されることもないので、認識されるためには異物が体内で増える必要もあります。最後に認識した後それを排除しようとするときに初めて免疫と異物の戦いが始まり、症状として自覚されるのです。この症状を患者はもとより、医者達は病気と称するのです。このような現象には、実は極めて多くの遺伝子が関わっているのです。従って、病気を詳しく正確に語るというのはいかに難しいかということがお分かりで

しょう。現代の免疫学というのは、実は今上に述べた免疫と異物の関わり方を遺伝子レベルで詳しく語ることです。私はそれをできる限り皆さんに分からせようとして、このホームページを作っているのです。

以上の話をまとめると、症状が出るのは免疫が上がらなければなりません。免疫が上がるといことは敵を認識し、かつそれを排除しようとする戦いを始めることです。それではまず発熱とは何でしょうか？発熱は感染症が起こっていることを示しています。多くの場合は敵は風邪のウイルスです。つまり免疫が上がっているのです。免疫が上がっている時には末梢神経や粘膜や皮膚の上皮細胞にいるヘルペスも見つけ出され、ヘルペスの戦いの症状が見られます。この症状が頭痛や肩こりやだるさであります。単純ヘルペスと水痘帯状ヘルペスと戦っている時にはせいぜい37.2度ぐらいまでであることを記しておきましょう。

次に紫外線とヘルペスの関係はどうでしょうか？まず紫外線について勉強しましょう。Wikipediaを参考にしながらコメントしましょう。

紫外線（しがいせん）は波長が10～400 nm、即ち可視光線より短い不可視光線の電磁波であります。nm というのはナノメートルと読みます。ナノは10億分の1であります。従って、1 nm は10億分の1 m のことあります。紫外線は、光のスペクトルで紫よりも外側になるのでこの名があります。可視光線は波長の長いものから、赤・橙・黄・緑・青・藍・紫の7色から成り立っています。このような可視光線の波長は、800nm～赤が一番波長が長く、つまり周波数が少ないのです。紫が一番波長が短く、周波数が一番多いのです。英語の ultraviolet も「紫を超えた」という語から来ています。（ラテン語の ultra は、英語の beyond に相当し、beyond は超えたという意味です）日本語では、紫外線と呼ぶのが一般的であります。violet をスミレ色とも訳すので、文学作品などでは、葦外線（きんがいせん）と呼ばれることもあります。また、英語の ultraviolet から略語で UV と略することはご存知でしょう。UV カットという言葉もご存知でしょう。

ついでに可視光線の波長とエネルギーの強さについて記載しておきましょう。可視光線の波長は赤の750nm から紫の380nm までであります。やはりエネルギーは周波数の短い紫が一番強いのです。下に色と波長とエネルギーの関係を記載しておきました。

色	波長	エネルギー
紫	380-450 nm	2.755-3.26 eV
青	450-495 nm	2.50-2.755 eV
緑	495-570 nm	2.175-2.50 eV
黄色	570-590 nm	2.10-2.175 eV
橙色	590-620 nm	1.99-2.10 eV
赤	620-750 nm	1.65-1.99 eV

赤外線が熱的な作用を及ぼすことが多いので熱線と呼ばれるのに対し、紫外線は化学的な作用が著しいので**化学線**とも呼ばれます。紫外線の有用な作用として殺菌消毒、ビタミンDの合成、生体に対しての血行や新陳代謝の促進、あるいは皮膚抵抗力の昂進（こうしん）などがあります。実は後で書きますが、人間が会う UV は、UVA と UVB であります。太陽光に長く当たるとヘルペスの症状が出るのは、可視光線の熱線によって血流が良くなり、かつこの UVA と UVB による血行や新陳代謝の促進による免疫の上昇によりヘルペスをやっつける力が増えるからです。

波長による分類法として、波長 380～200 nm の近紫外線(near UV)、波長 200～10 nm の遠紫外線 (far UV (FUV))、波長 1～10 nm の極紫外線 (extreme UV)に分けられます。また、人間の健康や環境への影響の観点から、近紫外線をさらに UVA (400～315 nm)、UVB(315～280nm)、UVC (280 nm 未満) に分けることもあります。

太陽光の中には、UVA、UVB、UVC の波長の紫外線が含まれていますが、そのうち UVA、UVB はオゾン層を通過し、地表に到達します。UVC は、大気中にある様々な物質による吸収が著しく、通常は大気を通過することができません。仮にオゾン層が破れてエネルギーが最も強い UVC が人体に到達しても、皮膚の黒色色素であるメラニンは、最もエネルギーの強い UVC をカットできるのです。言い換えると、メラニン色素細胞は、不必要な UV をカットするために生まれたのです。地表に到達する紫外線の 99%が UVA であります。

今現在用いられている UV カット化粧品は、紫外線を散乱させるか、紫外線を吸収させるかのどちらかの化粧品です。紫外線散乱剤には酸化チタン、酸化亜鉛などがあります。一方、紫外線吸収剤には、ケイヒ酸誘導体（メトキシケイヒ酸オクチル等）やパラアミノ安息香酸誘導体（ジメチル PABA オクチル等）やジベンゾイルメタン誘導体（t-ブチルメトキシジベンゾイルメタン）などがあります。これらの化学物質はやはり人体に影響があることは知っておいてください。

紫外線の波長ごとの特徴について説明しましょう。

近紫外線（波長 380～200 nm）には UVA と UVB と UVC の 3 つがあります。

1、UVA（波長 315～380 nm）

太陽光線由来のもののうち、5.6%が大気を通過します。皮膚の真皮層に作用し蛋白質を変性させます。細胞の物質交代の進行に関係しており、細胞の機能を活性化させます。また、UVB によって生成されたメラニン色素を酸化させて褐色に変化させます。この UVA による軽い日焼けは英語でサンタン (suntan)といい、いわゆる日光浴による健康な日焼けを意味します。

2、UVB（波長 280～315 nm）

太陽光線の由来のもののうち、0.5%が大気を通過します。表皮層に作用しますが、表皮の最下層の基底層にあるメラニン色素細胞がメラニンを生成し防御反応を取ります。これが皮膚が赤焼けしたり、めくれたりする日焼けであります。英語ではサンバーン (sunburn)といいます。

3、UVC（波長 200～280 nm）

オゾン層で守られている地表には通常は到達しません。強い殺菌作用があり、生体に対する破壊性が最も強いのです。細胞の DNA を損傷するからであります。下に詳しく記載してあります。地球温暖化やハロン系物質によりオゾン層が破壊されると、地表に到達してあらゆる生物相に著しい影響が出るのです。従って冷房で使われるフロンガスがオゾン層を破壊することが問題となり、近頃はフロンを用いることは禁止されています。

次に遠紫外線 (VUV)（波長 10～200 nm）について書きましょう。酸素分子や窒素分子によって吸収されるため、通常は地表には到達しない。真空中でないと進行しないため「真空紫外線」(vacuum ultraviolet)とも呼ばれています。

最後に極端紫外線（波長 10 nm 以下）について書きましょう。

極端紫外線は、極紫外線とも呼ばれます。極端紫外線は、物質の電子状態の遷移により放出されます。レントゲン写真に用いられる X 線との境界はあいまいです。

健康への影響

人間が、太陽の紫外線に長時間さらされると、皮膚、目、免疫系へ急性もしくは慢性の疾患を引き起こす可能性があります。大気を透過しない UVC は、過去ほとんど注意が払われていませんでしたが、高エネルギーであるため UVA や UVB よりはるかに危険であります。例えば、UVC を使用する紫外線滅菌装置などは装置の外で紫外線光源のスイッチを入れれば被曝の危険性があります。それでは具体的に皮膚と目に与える UV の影響について見てみましょう。

①皮膚

紫外線はたんぱく質を変性させるため、皮膚に紫外線が照射されると真皮にあるコラーゲン繊維（線維）および弾性繊維（線維）にダメージを与えて皮膚を老化させ、しわしわになります。コラーゲン線維は膠原線維のことであり、弾性線維はエラスチンともいいます。波長の長い UVA の危険性は近年まで軽視されてきましたが、皮膚の加齢、DNA へのダメージ、皮膚がんのリスクはゼロではないのです。特に、波長の長い UVA によって生ずる皮膚の老化は、UVA は UVB より深く皮膚の中に浸透するため、皮膚の張りを保つ弾性繊維を徐々に破壊する主要因となっているのです。また、一度破壊された弾性繊維は回復しないのです。日光にさらされる農業の仕事を長い間続けてきた農民は皮膚がしわしわになっているのも、いわゆる UVA の影響なのです。UVA は UVB と比べて、大気中で吸収されることが少ないので、UVB の減少する冬期や朝夕でも比較的多く降り注いでいます。従って日焼けのうちサンバーンを引き起こすことはないのですが、サンタンを引き起こすことは既に述べました。日焼けサロンで照射されるのは、主にエネルギーの少ない UVA であります。ただし、UVA を用いると、皮膚の老化を加速していることも忘れてはなりません。UVA は後で説明する SPF テスト（**Sun Protection Factor テスト**）では測定することができません。

UVB は日焼けのうちサンバーンを引き起こすことは既に述べました。UVC は最も波長が短く危険ですが、大気中でエネルギーが減衰し、ほとんど地上には届きません。UVB、UVC は、皮膚がん発現のリスクを伴います。どうして皮膚がんのリスクが増えるのでしょうか？生物の DNA は吸収スペクトルが 250nm 近辺に存在しています。吸収スペクトルとは、電磁波である光が物体を通過する時に、その物体によって光の特有な波長領域が吸収されて、その波長の領域が欠けてしまうか弱められることであります。そのとき、その波長領域を吸収した物体に影響が及ぶのです。この場合は、DNA に影響が及び、DNA の遺伝子が異常になってしまうのです。専門的に言い換えると、DNA に紫外線が照射されると DNA を構成する原子が励起されます。励起されるということは、外からエネルギーを得ることによって、最もエネルギーの低い状態である基底状態から、より高いエネルギーを持った状態、つまり励起状態になることです。励起状態を英語では、**excited state** といいます。まさに励起状態とは原子が興奮した状態であります。この励起は DNA 分子を不安定にして、DNA の螺旋構造を構成する 2 重鎖の「はしご」を切り離して隣接する塩基同士でチミン-チミン、シトシン-シトシン等の二量体を形成します。DNA は 4 つの塩基である、チミン、シトシン、グアニン、アデニンから成り立っていることはご存知でしょう。この 4 つの塩基のうち、3 つの塩基がひとつのアミノ酸を指定することもご存知でしょう。この 3 つの塩基をコドンということもご存知でしょう。ところが、この異常な二量体が遺伝子中のコドンを乱れさせ、DNA 配列の不正配列、複製の中断、ギャップの生成、複製や転写のミスを生じさせます。このことにより正常に遺伝子が機能しなくなった場合にがん等の突然変異を引き起こすのです。紫外線による突然変異は、バクテリアにおいて簡単に観察されます。これ

が地球環境問題でオゾンホールやオゾン層の破壊が懸念される理由の1つであります。

紫外線照射に対する生体の防御反応として、人間の体では茶色（黒色）の色素のメラニンを分泌して皮膚表面に沈着させる（これを「日焼け」という）ことにより、それ以上の紫外線の皮膚組織への侵入を防ぎ、より深い皮膚組織へのダメージを軽減させようとしています。この分泌度は人種によって異なっているため、このことが皮膚の色の違いによる人種の区別をもたらしているのです。日光が強い赤道地域では、それだけ紫外線が多くなるので、そこに住む人たちは紫外線から肌を守るために肌の色は黒くなり、北極や南極に近い地域に住んでいる人の肌は守る必要がないので白くなるのです。

市販の日焼け止めローション・クリームも紫外線の進入を防ぐために用いられるのです。これらの製品では、「SPF 値」「PA」と呼ばれる紫外線防御効果が記載されています。SPF 値は **Sun Protection Factor** の略で、主に日焼けの原因である UVB の遮断率を表しています。日光防御因子と訳せます。SPF25 の場合は、無対策の場合と比較して紫外線が 1/25 になり、SPF100 は 1/100 になります。一方、PA は **protection of UVA** の略で、最初の P と最後の A を取って PA と書くのです。UVA の遮断に対する効果を表しています。PA は+（効果がある）、++（効果がかなりある）、+++（効果が非常にある）、++++（効果が極めて高い）の4段階で表記されています。PA が SPF と異なり、数値で表記されないのは、UVA のブロック率を評価する良い分析法が存在しないためです。つまり PA は経験的な、あるいは臨床的な、視覚的な、感覚的な数値といえるのです。

②目

強度の強い UVB は目に対して危険であり、雪眼炎（雪目、雪眼）や紫外眼炎（電気性眼炎）、白内障、翼状片と瞼裂斑形成になる可能性があります。実は翼状片はヘルペスによるものなのです。翼状片について詳しく書きましょう。

翼状片とは何でしょうか？医学事典的な翼状片の説明から始めましょう。翼状片は、白目の表面を覆っている半透明の膜である結膜が、目頭（めがしら）の方から黒目に三角形状に入り込んでくる病気です。白目は一番下が強膜、その上がテノン囊、その上が結膜、と言う3層構造になっています。紫外線などの影響で、テノン囊と結膜が異常に増殖して、角膜に伸びてきたのが翼状片です。翼状片の状態になっている結膜部分が盛り上がる場合があります。ゴロゴロしたり、ごみが入ったような異物感などの自覚症状が感じられます。また、結膜の部分はしばしば充血して赤く見えることがあります。この翼状片の本体は、結膜下の線維芽細胞の増殖のためであります。紫外線による刺激が一因とされ、赤道直下の地域に多発しています。治療は切除術であります。再発率が高いのです。片目だけに生ずることもあります。両目に起こることの方が多いのです。これで翼状片の医学事典的な説明は終わりました。さあ、これから私の批判的コメントが始まります。

まず翼状片の病気の原因はどう考えるべきでしょうか？翼状片の病名はどうして生まれたのかから説明しましょう。翼状片は、目頭から黒目に向かって三角形に現れます。ちょうど飛行機の翼の先端のように見えるので、翼状の断片という意味でつけられたのです。現代の辞書的な説明では、翼状片が起こる原因は、紫外線が関わっているとか、結膜の結合組織の異常増殖であるとかと書かれていますが、どうして紫外線が翼状片を起こすのか、なぜ結合組織が増殖するのかについては一切ふれられていません。しかもどうして目がゴロゴロしたり、違和感を感じたり、白目が充血したりするのかの理由についても一言も書かれていません。切除しても再発率が高い理由についても一切書かれていません。結論から言うと、ヘルペスが原因なのです。証拠はどこにあると思います

か？この答えも極めて簡単です。抗ヘルペス剤を飲むことによって良くなるからです。さあ、なぜ翼状片がヘルペスによるものであるかについて詳しく論証していきましょう。

おそらく目の結膜に知らないうちに傷がつき、そこから侵入したヘルペスウイルスが結膜の細胞に入り込みます。元来、ヘルペスウイルスは神経細胞に一番親和性があり、たくさん住みついているのですが、結膜や粘膜や皮膚の上皮細胞にも住みつくことができます。ストレスやリンデロン点眼薬などのステロイドなどにより免疫が落ち、その間にヘルペスが増殖します。紫外線である UVA や UVB は結膜の血行を良くして免疫が上昇します。目頭の結膜の細胞に増殖したヘルペスウイルスは、NK 細胞やキラーT 細胞によって破壊されます。その部分の結膜の細胞は欠如します。その炎症により欠如した部分が線維芽細胞によって作られた膠原線維によって覆われます。ヘルペスウイルスは免疫によって殺されにくいのです。いつも言っているように、人類最後の敵はヘルペスであるのは既に皆さんご存知でしょう。

それでは結膜の免疫はどうなっているのでしょうか？それを話す前にテノン囊について話をする必要があります。白目は一番下が強膜、その上がテノン囊、その上が結膜、と言う3層構造になっていることは既にも書きました。つまり結膜の下にテノン囊があるのです。テノン囊というのは別名テノン鞘ともいいます。このテノン鞘と強膜の間をテノン腔といい、リンパ液で満たされています。あらゆる組織にはリンパ管が張り巡らされていますが、結膜も例外ではありません。しかしながら、一旦ヘルペスが結膜の細胞に入り込むと、免疫から逃れるすべを誰よりも有しているヘルペスウイルスを簡単にやっつけることができないのです。殺しきれないヘルペスはいつまでも結膜にとどまり、ときどき免疫がヘルペスを見いだしたときだけ、徐々に徐々にヘルペスと免疫の戦いが繰り返され、その炎症の跡が広がっていき、翼状片となるのです。ヘルペスと戦う時に違和感や不快感や充血が生じるのです。たとえ翼状片を切除しても、ヘルペスが侵入している細胞を完全に取り除くことができないので、いつまでも再発が繰り返され、何回も手術をしなければならぬ翼状片の患者さんが存在することになるのです。そんな手術を繰り返すために角膜まで影響が及び、目が見えなくなることがあるのです。翼状片は抗ヘルペス剤で治すことができるのです。現在、原因不明の病気の大半はヘルペスによるものだと知っておいてください。

保護メガネは、紫外線（特に短波長の紫外線）にさらされる環境で働く場合（電気溶接作業）や、その様な環境（雪山やスキー場のゲレンデなど）にいる場合には有効であります。保護メガネで覆われていない横から目に入る紫外線を防止するために、高高度の登山家が使用するようなゴーグル状の完全に覆われた保護メガネを使用したほうが曝露に対するリスクが減少するのです。登山家は、高高度では地表に比べて大気による減衰が小さくなり、雪や氷による反射が存在することにより、通常より高いレベルの紫外線にさらされるため、そのような完全に覆われた保護メガネを使用しているのです。

通常のメガネは、わずかの保護効果があります。ガラスは UVA に対して透明であるのに対し、プラスチックは通過率がガラスより低いため、プラスチックレンズは、ガラスのレンズより保護効果があり、材質(例えば、ポリカーボネート)によっては、ほとんどの紫外線が妨げる場合もあります。ただし、いくら良いレンズによる保護措置を行ったとしても、レンズ以外の経路を経由した紫外線からは目を完全に守ることはできません。眼鏡に十分な紫外線対策を期待するならば、フレームの形状も考慮するべきであります。上部からの紫外線の侵入を減らすため、外出時はつば付きの帽子の併用が奨められます。レンズ以外の経路を経由する光を確認するには、レンズの部分をアルミホイルのような不透明なもので覆って、明るい光のそばに立つことで確認することができます。ほとんどのコンタクトレンズは紫外線を吸収し網膜を保護します。

さあ、皆さん夏も本番に入っています。ますます太陽光線に含まれる紫外線には気をつけましょう。

今日は「しかし、発熱、疲労、ストレス、強い紫外線、外傷などの刺激により免疫が低下して、ウイルスが活動し始めると症状が出てきます。」という川島先生の文章の中の「強い紫外線」がヘルペスとどのように関わりがあるかということコメントするだけで、これだけ時間がかかってしまいました。次回は外傷についてコメントする予定です。）

今日はここまでです。2014/08/07

外傷とは一体何でしょうか？まず外傷の定義から話しましょう。組織や臓器の生理的な連続性の破綻が体外からの様々の障害を起こす刺激で生ずることあります。言い換えると体外からの刺激や外力で生ずる傷（損傷）といえます。この外傷をいくつかの基準によって分けることができます。

まず傷の状態による分類であります。開放性の傷と、非開放性の傷があります。つまり穴が開いて体の組織が外にむき出しになっているかいないかで分けます。

次に傷が起こる刺激の種類によって分けることができます。鋭角的なものによって生ずる傷か、鈍的なものによって傷つけられるか、高エネルギーによる事故によって生ずるかであります。

さらに外力の種類による分類もあります。これが一番多いので分かりやすいでしょう。まず高温物質による熱傷、つまりやけどです。逆に寒冷刺激による凍傷です。さらに電気による電撃傷、例えば落雷です。銃器による銃創、さらに化学物質による損傷、放射線による傷害、最後に動物や昆虫による咬み傷などあります。

最後に受傷状況による分類もあります。転落事故、交通事故、災害、戦争、スポーツ事故、自傷などあります。このように分類法は4つあります。

いずれにしろ組織や臓器が傷つくことであります。以上、全ての傷について語ったのでありますが、外傷が起こったからといって、必ずヘルペスとの戦いが起こらないことは、皆さん既にご存知でしょう。いずれにしろ外傷はストレスとなることは確かでしょう。

するとその外傷というストレスに耐えるために、傷を受けた人はストレスホルモンを出して、痛みを耐え、かつ悔恨の心の痛みを耐え、時には自己の責任の重圧に耐えるために、さらに傷が治るかどうかの心配に耐えるためにステロイドホルモンを出さざるを得ないのです。すると、ストレスホルモンが増えると免疫が下がるのですが、下がったからヘルペスウイルスの症状が出る訳ではないのです。ここを川島先生が誤解しておられます。彼は免疫が低下している間に、ヘルペスが増えるだけで症状は出ないということを理解しておられません。実は傷が治り、心の重荷も取れて、ほっとしたときにはステロイドホルモンは不必要となり、免疫が回復して、増えたヘルペスウイルスを免疫が見いだして戦いが始まり、ヘルペスのさまざまな症状が出るということも、川島先生はご存じないようです。残念ですね。現代の医療界を指導している大学の医学部の先生がこの有様ですから、日本の医療は一向に良くなるらないのです。それどころか病気を増やし続ける先生方が多くなってしまふのです。残念ですね。）

4. どんな治療をするの？

口唇ヘルペスの治療には、ウイルスの増殖を抑える"抗ヘルペスウイルス薬"の飲

み薬や塗り薬を使います。このお薬はウイルスが増殖している時に効果を発揮しますので、症状が出たら、できるだけ早く使い始めることが重要です。(川島先生は、なぜヘルペスウイルスが増殖するかについては、医学的には一言も触れられておりません。何となく色んな状況においてヘルペスが増えると言っておられるだけで、これは医学ではありません。確かに抗ウイルス剤は、増殖を抑えることができるのですが、増殖を抑えたからといって、ヘルペスの様々な症状がでないのかについても全く説明がありません。こんなパンフレットを日本中の愚かな患者に見せるものですから、ヘルペスに対する一般大衆の理解度がいつまでもいつまでも向上しないのです。

なぜこのような誤りが出るのでしょうか？実は世界中の医学者が病気に対して根本的に間違っていることに全く気づいていないからです。それは私がいつも言っているように、病気とは免疫と異物の戦いであるという根本認識が欠けているからです。漠然と症状だけを並び立てることだけが、現代の世界の医療水準なのであります。言い換えると、異物が人体に入っても免疫が働かない限りは絶対に病気は起こらないのです。不思議なことに、この点だけの根本原理は、世界中の医学者たちは理解しているようです。なぜならば、病気が起これば必ず免疫を抑える薬を使おうとするからです。皮肉なことです。言い換えると、世界中の医学者たちは、病気は症状であると考えていることです。症状はあくまでも、免疫と異物との戦いであるという考えも抜け落ちてしまっています。ただヘルペス性口唇炎の場合は、ヘルペスが原因であるというだけで、免疫がヘルペスを殺そうとしているからであるとは、口が裂けても言わないのです。現代の医学はエセ医学であります。なぜならば医学論理が完全に破綻しているからです。

一般大衆は医学のみならず、勉強をしないものですから、全てにおいて無知であります。とりわけ医学においては、有名大学の医学部の教授先生方がおっしゃることは、金科玉条の如く簡単に信じてしまいます。日本の医療界は、たった40万人の医者によって1億2500万人の日本人が支配されています。しかも40万人の医者を何千人という大学医学部の教授先生が完全にコントロールしています。40万人の医学会も組織でありますから、必ず組織の論理が働きます。組織を維持するためにはお金が要ります。金儲けのために嘘をつかざるをえなくなるのです。この真実は世界中のあらゆる組織についていえることです。医学会もこの組織の論理から逃れることはないのです。残念です。この世に真実によって動いている組織などはひとつもないのです。残念です。

もう一度川島先生の文章を見てみましょう。『このお薬はウイルスが増殖している時に効果を発揮しますので、症状が出たら、できるだけ早く使い始めることが重要です。』この通りであれば、増殖している時は、まさにステロイドホルモンを患者が出している時ですから、実は症状が出ていない時、つまりストレスがかかっている時にヘルペスウイルスは増殖するのですから、このときこそ抗ウイルス剤を使うべきなのです。皆さん、この理屈が分かりますか？川島先生がおっしゃっていることは全て理屈が合わないのです。実際ヘルペスはひとたび神経に入り、増殖するだけでは症状が出ないのですから、常に抗ヘルペス剤を飲めば良いという論理が成り立つのです。この論理は一部は正しい可能性があるのです。全ての人は必ず水痘帯状ヘルペスを持っています。なぜならば全ての人が乳幼児期に水疱瘡にかかっているからです。川島先生にお願いしたいことがあるのですが、一度ご自分の患者さんの全てに抗ヘルペス剤を1年間飲ませ続ける治験をやってみてはどうですか？というお願いです。とりわけストレスの強い人を選んで、

症状が何もない時に抗ヘルペス剤を飲ませるといふ治験は必ずヘルペスを減らすことに成功すると思いますが、いかがでしょうか？そうすればあらゆるヘルペスの症状が消えてしまう可能性があると思いますが、いかがでしょうか？と、川島先生にお願いしたいところです。ワッハッハ！)

お薬を使用することで、症状を軽減し、治癒までの期間を短くすることができます。(なぜ症状が軽減するかについて、彼は述べていません。私が説明しましょう。それは神経線維に増殖したヘルペスを認識した免疫が殺すことができたからです。さらに治療までの期間を短くできると書かれていますが、治療とは一体何かについても彼は語っていません。抗ヘルペス剤でヘルペスが増えないということが治療だと考えておられるとすれば、えらい間違いです。免疫が殺すべきヘルペスウイルスを見つけることができなくなると書くべきなのです。)

お薬を使い始めても2日ほどは症状が悪化することがあります。(なぜ症状が悪化するのかも彼は説明してしません。全ての人が悪化する訳ではありません。それも私が説明してあげましょう。答えは簡単です。抗ヘルペス剤を使おうが使うまいが、その時点ではもともと免疫の力は同じです。皆さん考えてください。自分1人で100人の敵を前にしている場合と、10人の敵を前にしている場合と、どちらが戦いやすいですか？つまり炎症が起こりやすいですか？100人では敵をやっつける力が分散してしまい、殺し合いの炎症の度合いが減ります。ところが10人を相手にした時は殺しやすくなり、つまり炎症の度合いが高くなるからです。炎症が高くなればなるほど、症状は悪化するからです。この症状の悪化、つまり神経における炎症の度合いも、患者自身の免疫の力とヘルペスの量に依存するので個人差がありますので、悪化がない人はいくらでもいます。)

自己判断でお薬をやめず、医師の指示通りに使用してください。なお、潜伏中のウイルスを追い出すお薬は、現在のところありません。症状が出てきたら、できるだけ早く受診しましょう。(この通りです。ひとたび神経節にヘルペスウイルスが隠れてしまうと、免疫はヘルペスを見いだすことができないので、飲んでも意味がないのです。つまり、すべからく抗ウイルス剤というのは、抗ヘルペス剤を含めてウイルスの増殖を抑える薬であるのです。ヘルペスが増殖しながら隠れ家である神経節から出て行こうとするときに、抗ヘルペス時が神経細胞に入り込んで増殖させないようにしているだけなのです。戦いが免疫とヘルペスウイルスとの間で起こり、症状が出てくるのは、この神経線維に増殖していたり、皮膚の表皮細胞から隣の表皮細胞へと増殖したり、あるいは粘膜上皮の上皮細胞から隣の上皮細胞へ増殖していく時だけに免疫がヘルペスを見つけ出して様々な痛みや症状が出るので、この時に飲めば良いのです。ところが今の保険制度では、痛みや痺れの症状や、頭痛や肩こりやこむら返りの原因がヘルペスとの戦いであるのにもかかわらず、つまり見えないヘルペスの増殖があるにもかかわらず、5日間しか抗ヘルペス時を使えないのは絶対に間違っているのです。5日以上使うと自費になってしまうのです。残念ながら、ヘルペスの権威といわれている川島先生もこの真実をご存知でないのです。悲しいことですね。その代わりに、近頃ではリリカという痛み止めを保険でいつまでも使えるようにしているのですが、その間にこっそりとヘルペスが増殖していることを川島先生はご存じないのです。残念ですね！

それではなぜこんなバカな医療を認めているのか、皆さんお分かりですか？これに対する答えも極めて簡単です。現代の病気の原因は化学物質とヘルペスであ

るということを理解されているでしょう。しかも化学物質とは自然後天的免疫寛容によって共存できることもご存知でしょう。ところがヘルペスウイルスだけは、しかも8種類いるのですが、絶対に殺しきることができないどころか共存も絶対にできないのです。従って神経を持った人類を始めとする全ての生命は、個人の生涯のみならず、種の絶滅までヘルペスウイルスと戦い続けなければならないのです。このヘルペスウイルスを神経節に隠すまで抗ヘルペス剤を飲み続ければ、症状はなくなってしまいます。上に書いたのですが、抗ヘルペス剤として、アシクロビルの2000倍ものヘルペスウイルス増殖抑制力をもっているソリブジンが30年前になきものにされたこともご存知でしょう。

HIVウイルスに対しても抗HIV剤ができて、増殖を抑えるので、AIDSで死ぬ人もなくなりました。今現在も西アフリカで猖獗を極めているエボラ出血熱にも、極めて迅速に抗エボラ出血熱ウイルス剤が開発されています。いや簡単に開発することができるようになったのです。従って、8種類のヘルペスに対してソリブジンよりももっと優れた抗ヘルペス剤を開発することぐらい簡単なことなのです。にもかかわらず医薬業界は急いでやらないのでしょうか？病気が全てなくなってしまふからです。医薬業界の目標は病気や病人をなくすことではないのでしょうか？全人類の喜びとなるのですが、病気がなくなればひとつだけ困ったことが起きます。それは医薬業界の人たちが全て失業してしまうことです。医薬業界が繁栄し続けるということは、病気を作る以外にはないのです。悲しいことですね。病気がなくなれば宗教もなくなるかもしれないのに、世界中は宗教戦争で殺し合いの真ただ中にあります。病気が全てなくなれば宗教戦争も全てなくなってしまふでしょうに。にもかかわらず、医薬業界は病気を作り続けることに邁進しているのです。悲しいですね。

最後に皮肉な結論から言いましょ。抗ヘルペス剤を飲ませるべき最高のタイミングは、ストレスがかかっている時だけなのです。つまり症状がなく、かつ確実にストレスがかかりステロイドホルモンを出している時こそ、ヘルペスウイルスが増殖している時なので、増殖を抑える抗ヘルペス剤を飲ませるべきなのです。皆さん、なんという皮肉な結論なのか理解できますか？これこそ予防医学の精髓であるのです。症状などはどうでもいいのです。なぜ病気が起こるのかを常に考えるべきなのですが、現代の医学は全く反対のことをしているのです。残念です。)

5. 日常生活での注意点は？

〈症状が出ていない時の注意点〉

栄養のバランスがとれた食事と十分な睡眠、適度な運動により、疲れやストレスを溜めないようにしましょう。(栄養のバランスが取れた食事が必要なのは、自分自身の免疫の成分を常に充分につくれるようにするためです。睡眠不足は免疫を抑えるステロイドホルモンを出し続けることになり、その間、ヘルペスウイルスが様々な神経で増え続けるので、十分な睡眠が必要なのです。適度な運動も、実は曖昧な言葉です。どの程度が適度なのかを川島先生は書いていません。

私は常に疑問を感じることがあります。「適度」とか「適切な」という言葉が何を意味しているのかが分からないのです。何を基準として「適切な」という言葉が使われるのでしょうか？皆さんもいろんな本や新聞雑誌を読む時に考えてもらいたいのです。「適切な」という単語が出てきたら、それは眉唾の文章であると考えた方が良いでしょう。「適切な」という言葉は、「健康」と

という言葉と同じぐらいまやかしの言葉です。健康食品とは一体何なのでしょう
か？健康が大事というのは何が大事であるのかを意味しているのでしょうか？

なぜ疲れやストレスをためたらダメなのでしょう？皆さん、もうご存知でしょう。疲れもストレスもステロイドホルモンを出しすぎることになるからです。ストレスホルモンが出過ぎると免疫を抑えることになるからです。免疫を抑えている間にヘルペスが増えることになり、疲れもストレスもなくなってしまうと再び免疫が戻り、ヘルペスとの戦いが始まり、様々な症状が出るからです。病気が良いことであるのは、免疫が上がったから病気になるのです。

もちろん、もし人体にヘルペスがなければ、絶対にヘルペスとの戦いはないわけですから、口唇ヘルペスという病気も絶対に起こらないのは言うまでもないことではと思いますが、つまりこの世に異物がない限り、病気は絶対に起こらないことを知ってください。)

疲れている時や体調がすぐれない時は、強い紫外線を浴びる屋外でのレジャーは控えましょう。くちびるやその周りにピリピリ、チクチクするような違和感やかゆみなどの症状が出てきたら、できるだけ早く受診しましょう。「水ぶくれ」や「かさぶた」にはなるべく触れないようにしましょう。

〈症状が出ている時の注意点〉

かさぶたは取らないようにしましょう。人にうつさないように、水ぶくれに触れたら、石けんを使って手をきれいに洗いましょう。タオルやコップは共用しないようにしましょう。赤ちゃんとの接触はできるだけ避けましょう。(単純ヘルペスの罹患率は、5割前後です。しかしいずれにしろこれだけ人間同士の接触交流が多くなる時には、遅かれ早かれ単純ヘルペス感染が起こってしまいます。しかも単純ヘルペス自身も、言うまでもなく、死に至る病を起こす訳でもないので、怖がることはないのです。口唇ヘルペスは、実は水痘帯状ヘルペスによっても起こるのです。肝心なことは、感染しても増殖させないようにすることです。つまりステロイドホルモンを増やさないようにすることです。常に幸せであれば、ステロイドホルモンは必要最小限の量が副腎皮質で作られるだけです。ヘルペスウイルスが増えることはないのです。幸せであれば、常にヘルペスウイルスは神経節に押し込めることができるのです。

それでは皆さん、人間が常に永遠に幸せを感じられる最高の心の状態は何だと思えますか？その答えは常に書いていますように、自分よりも幸せそうな金持ちの人に喜びを感じ続けてあげることです。これほど簡単なことはないのですが、ほとんどの人ができません。逆に言うと、資本主義は金で動いている社会ですから、金を持っている人に嫉妬を感じないということは逃れようもないかもしれないと考えている人がいるでしょう。ところが、嫉妬を感じるのと自分よりもすぐれた人の幸せを感じることは実は少し違いがあります。おそらく欲がある限り、向上心を持っている限り、嫉妬は死ぬまで消え去ることはないでしょう。しかし嫉妬を感じた後に、欲しいものを持っている他人の喜びを感ずるよう反省して努力すれば可能な心のあり方なのです。本当の幸せが欲しい人は、この真実に気づくでしょう。皆さん、努力してください。永遠に幸せになりましょうよ。)

赤ちゃんはウイルスに感染すると重い症状を起こすおそれがあります。(なぜ赤ちゃんが重症になるのでしょうか？その説明がないので私がしてあげましょう。これも答えは簡単です。生後6ヶ月までの赤ちゃんは、お母さんから胎盤を通じて、ヘルペスウイルスに対するお母さんが作った特異IgG抗体が赤ちゃんに与えられています。ところが6ヶ月前後に、お母さんからもらった様々な種類の

IgG抗体が消えていきます。すると自分で抗体を作る必要があります。赤ちゃんの免疫は、生後からすぐに免疫の発達が始まり、完成するのに成人まで続きます。重い症状というのは、実は免疫がヘルペスウイルスと激しい戦いをしているからです。

例えば生後6ヶ月～18ヶ月の間に、ほとんどの小児に見られる突発性発疹という病気をご存知ですか？別名、小児のバラ疹ともいいます。これは、8種類のヘルペスのうち、6番目と7番目のヘルペスウイルスと戦っている時に見られるのです。主に6番目のヘルペス（HHV6）が原因であります。他にも同じような症状はエンテロウイルスやアデノウイルスなどの、風邪のウイルス感染のときにも見られることがあります。感染経路は親の咽頭から排出されるヘルペスウイルス6（HHV6）が感染し、約10日間の潜伏の後、突然高熱を出し、3～4日間持続し、熱が下がるとピンク～紅色の岡のような発疹（丘疹）が出現し、体幹から上肢、頸部に広がっていきます。ときに腫れぼったいまぶたや、頸部のリンパ節の腫れや、氷山斑といって口蓋垂の両側に強い斑状発赤を認めることがあります。軟便や下痢が見られることもあります。顔面や下肢には少ないのです。この発疹は1～2日で消失し、跡に落屑や色素沈着は残りません。熱がある時に、頭蓋骨の頂点にある大泉門という部分が膨隆したり、このとき1回から数回の痙攣を伴うことがあります。

ここで症状がきついということの意味について考察してみましょう。先ほど言ったように、症状の強さは免疫とヘルペスとの戦いの強さを物語ります。一番症状がないのはどんな状態でしょうか？それはヘルペスウイルスが体内に入らないときです。この時はヘルペスウイルスがゼロであるので、戦いの症状もゼロであるのです。当たり前のことですが、医学はこのような医学の真実を無視しているからこそ、当たり前のことを書かざるをえないのです。ということは、ヘルペスウイルスが多ければ多いほど戦いが強くなり症状が重くなるということです。ところがこのとき、ヘルペスが増えるだけでは症状が何もでないことを知っておいてください。このとき免疫が極めて強い時にはどうなるのでしょうか？症状が出ないのです。免疫が強いということは、ヘルペスに対する特異抗体がたくさんあるということです。この状態がヘルペスウイルスに対する免疫がついて、抗体が大量にできている大人の免疫の状態なのです。

それでは赤ちゃんの免疫の状態はどのような状態でしょうか？赤ちゃんが初めてヘルペスウイルス（HHV6）に遭遇して、どのようにしてHHV6を制御しきるかのストーリーを簡単に書きましょう。このウイルスが喉に入ってきます。喉の結合組織に居着いている樹状細胞がこのウイルスを食べて、所属リンパ節である頸部リンパ節に運んでいきます。この頸部リンパ節にいる様々なTリンパ球とBリンパ球に樹状細胞はHHV6の断片を見せます。この断片だけを認識できる特異的なTリンパ球とBリンパ球だけが共同しあいながら成熟し、HHV6に対する抗体を作り始めます。これを液性免疫といいます。この抗体は血管により咽頭の組織まで運ばれます。そこにいるHHV6とこの抗体が結びつくと、そこにいる大食細胞や好中球によって殺されます。同時にHHV6だけを認識するキラーT細胞だけが頸部のリンパ節などで増えていきます。このキラーT細胞の働きを細胞性免疫といいます。このキラーT細胞も咽頭まで血管で運ばれ、咽頭の細胞に入り込んだHHV6を細胞もろとも殺します。このように、液性免疫と細胞性免疫の成熟は頸部リンパ節で行われるので、頸部のリンパ節が腫れたりするのです。というように、赤ちゃんはゼロからHHV6を殺すために仕事をするのに時間がどうし

でも長くかかります。その間にHHV6がどんどん増え続けます。もちろんヘルペスウイルスは、増殖をすることはできますが人を殺したりすることはできないので、必ず最後は免疫が勝つようになっています。つまりHHV6を殺すための時間が赤ちゃんは、どうしても免疫のついた大人よりも、長い時間が必要なのです。その間に増え続けたHHV6との戦いも激しくなり、症状も重症になることがあるのです。

ここで問題が残るのです。果たしてHHV6が完全に殺されているかどうかであります。やはり神経に隠れ続けるのです。HHV6についての研究はまだまだ充分ではないのです。何もHHV6だけではありません。8種類の全てのヘルペスウイルスについての研究はし尽くされているはずですが、表に出てこないというのが正しい言い方でしょう。残念です。人類最後の敵であるヘルペスさえ完全に制御すれば、ほとんどの病気は存在しなくなるのに残念です。)

赤ちゃんのお世話をする時は、手をきれいに洗いましょう。また、患部が赤ちゃんに接触しないように注意しましょう。患部を清潔に保つため、症状が出ている時も石けんや洗顔料をよく泡立てて、やさしく洗いましょう。保湿剤などを用いたスキンケアや化粧をする場合は、刺激になることもありますので、患部は避けましょう。

今日はここまでです。2014/08/21

次回は、川島先生がお書きになった帯状疱疹ヘルペスの説明書に対する批判的なコメントをする予定です。